

もう前置詞で間違えない！ ～コアイメージで捉える前置詞～

英語班:川村 結衣、辻 良仁、濱松 心音、山本 実空

Abstract

The purpose of this study is revealing whether the “core image” is related to the cause of people studying English making errors in the preposition or not. After studying, we found that many students have been influenced by the Japanese translations and have selected wrong prepositions. Therefore, this study concludes that only understanding the “core image” is not enough for learning the preposition.

要約

本研究の目的は、英語学習者が前置詞を間違える原因はコアイメージと関係があるのかを明らかにすることである。調査によって、日本語の文に影響を受けて間違えた前置詞を選んでしまう人が多いということがわかった。従って本研究では、コアイメージを正しく理解するだけでは前置詞を習得するのに不十分であるということが結論付けられた。

1 はじめに

英語学習者にとって英語の前置詞は難しく、誤用しやすい。この難しさが生まれるのは、個々の前置詞が持つコアイメージと、英語学習者がそれらの前置詞に対して抱くイメージに差異があるためだと推測される。私たちは、英語学習者に認識されていない前置詞のコアイメージを示すことで、英語能力の向上に寄与できるのではないかと考えた。そこで、高校生を対象に、起こりやすい前置詞の誤用を調査し、その誤用を起こす原因となる前置詞のイメージを明らかにした。

本研究では、混同の誤用が多い前置詞にどのような傾向がみられるのか、また混同してしまう原因はなにかを明らかにする。先行研究では、コアイメージを用いた指導をすると、指導する前より前置詞テストの平均点が高くなった。つまりコアイメージを用いた学習は前置詞習得に有効であったという結果が出ている。よって前置詞を間違える原因はコアイメージを正しく掴めておらず、認識との間にズレが生じているからであると考えた。

なお本研究では、前置詞が持つどの意味にも共通する核となる意味をコアイメージとして扱う。

2 研究手法

高津高校生406人に対してGoogle フォームでアンケートを実施した。アンケートには20題の英文問題(以下、「前置詞問題」と呼ぶ)を含めた。問題のそれぞれの英文の中に空欄をおき、最も適切と思う前置詞を選ぶことを求めた。その際、質問を必須項目にし、無回答がないように依頼した。選択肢は for, of, with, on, to, at, from, in, by, about, asの11語である。なお、選択肢、前置詞問題の選定は、次のように行った。

① 選択肢の選定

11語の前置詞は前置詞として使用する頻度が高いものに絞った。群動詞も除外した。使われやすい前置詞について研究し、より英語学習に役立つ結果を得るためである。

② 前置詞問題の選定

20題の問題は、『必携英単語LEAP』から10題、『ロイヤル英文法』から10題選定した。その際、正答となる前置詞に偏りが出ないようにした。また、比較的難易度の高い問題を選んだ。

実際に出題した前置詞問題は以下の通りである。

問題文

「空欄に当てはまると思う前置詞を選択してください(調べずに教えてください)」

選択肢 for, of, with, on, to, at, from, in, by, about, as

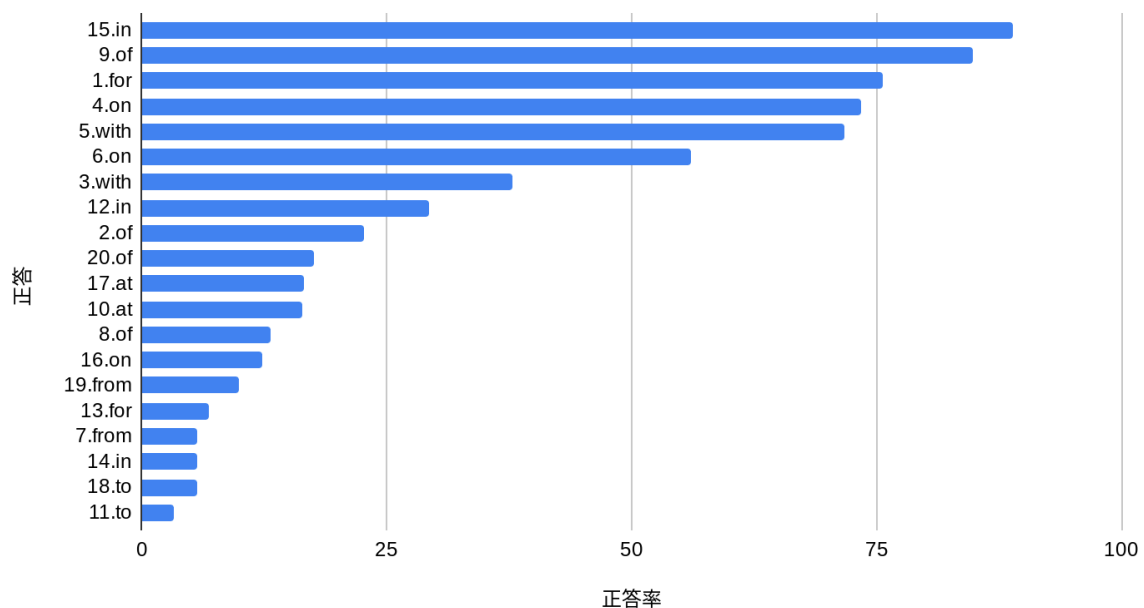
問題番号	出典	単語番号 (『必携英単語LEAP』) または ページ数 (『ロイヤル英文法』)	問題文 (日本語)	問題文 (英語)	正答
1	ロイヤル 英文法	p.681	ビールとワインは子供にふさわしくない。	Beer and wine are not fit () children.	for,to
2	LEAP	403	うそをついたことで彼女を非難する	accuse her () lying	of
3	ロイヤル 英文法	p.697	雌牛は人に牛乳を供給する。	Cows supply us () milk.	with
4	LEAP	001	私たちはこの点で意見が一致した。	We agreed () this point.	on,with
5	ロイヤル 英文法	p.697	メアリーはその包みを赤いリボンで結わえた。	Mary tied the package () a red ribbon.	with
6	LEAP	004	図書館の利用法に関するヒント	tips () how to use the library	on,about
7	LEAP	460	1日中歩いてくたくただ。	I am exhausted () walking all day.	from,by
8	LEAP	009	頭痛がすると訴える	complain () a headache	of
9	ロイヤル 英文法	p.692	彼女は高貴な家柄の出である。	She came () a noble family.	of,from
10	ロイヤル 英文法	p.685	彼らは昼食をとっている最中で、1時まで戻らないでしょう。	They are () lunch, and will not be back until one o'clock.	at
11	LEAP	028	計画の重大な変更	material changes () the schedule	to
12	LEAP	049	私の体は調子がよい。	My body is () good condition.	in
13	ロイヤル 英文法	p.687	監督はモダンジャズの趣味があった。	The director had a taste () modern jazz.	for
14	ロイヤル 英文法	p.681	彼は常識に欠けている。	He is lacking () common sense.	in

15	ロイヤル 英文法	p.691	彼のすべてのスケッチは鉛筆で描いてある。	All his sketches are () pencil.	in,with,by
16	LEAP	404	家に帰ると言い張る	insist () returning home	on
17	ロイヤル 英文法	p.684	彼らは的をめがけて撃った。	They shot () the target.	at
18	ロイヤル 英文法	p.696	彼女は全力をあげてその仕事をした。	She did the work () the best of her ability.	to
19	ロイヤル 英文法	p.689	彼は義務感で行動した。	He acted () a sense of duty.	from
20	LEAP	070	日本生まれの人	a native () Japan	of

3 結果・考察

アンケートには1年生100名、2年生302名、所属学年不明4名の計406名からの回答が寄せられた。20問の正答率は以下の通りである。

問題番号と正答率



グラフ①

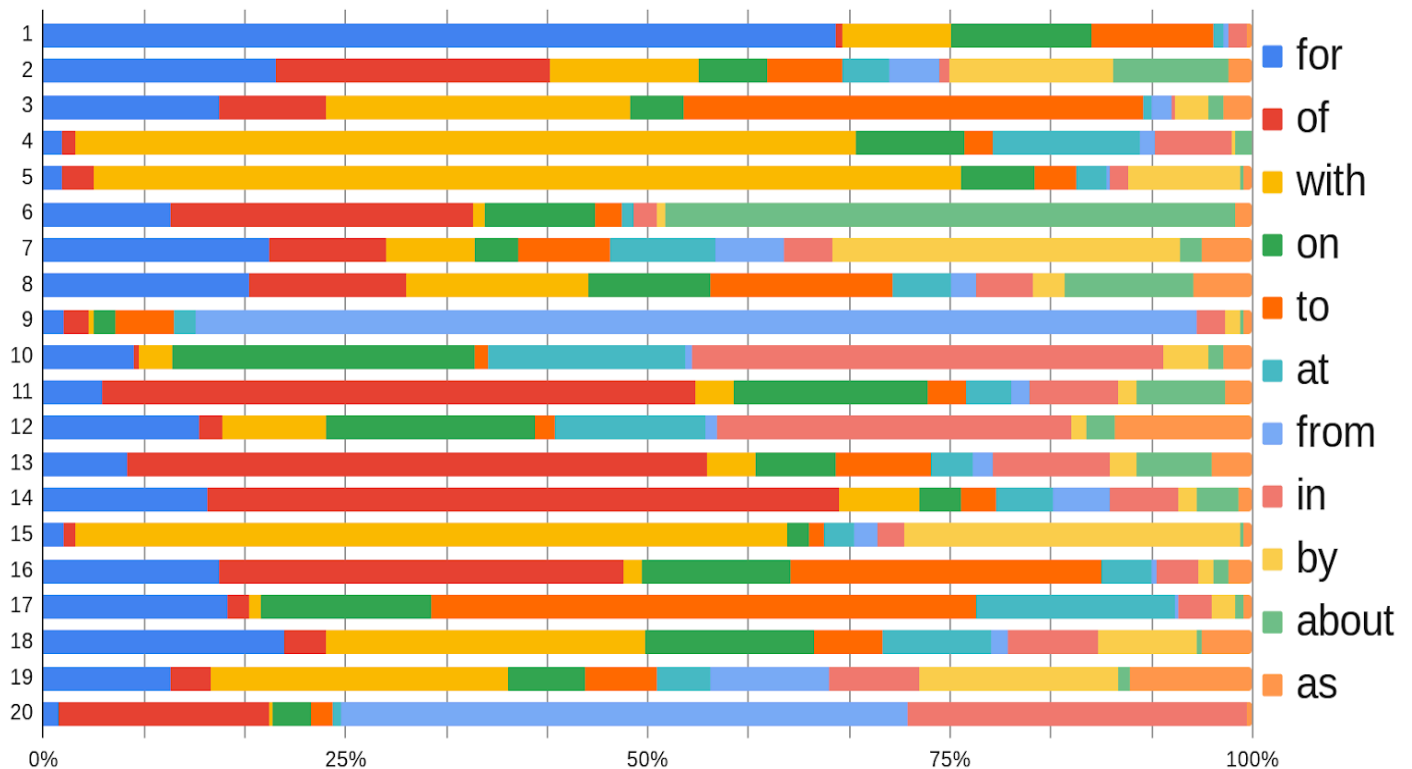
ALTの先生に助言をいただいたところ、複数正解がある問題が生じたため、それらの問題は正答率が高くなっている。別解がないのにも関わらず、5番のwithが正解である問題の正答率が70%を超え、非常に高かったが、基本的には正解が一つしかない問題の正答率は50%を下回り、低い結果となった。

また、各前置詞問題に対して選択された前置詞それぞれの割合は以下のグラフ②の通りであった。縦軸に前置詞問題の各問題番号をとり、色分けは青がfor、赤がof、黄色がwith、緑がon、橙がto、青緑がat、水色がfrom、ピンクがin、薄い黄がby、薄い緑がabout、薄い橙がasで表されている。

グラフ②

《問題別の考察》

ここからは、各問題と選択率の高かった上位4つの前置詞から、正答率または誤答率高かった原因を考察していく。正答は太字、下線で表している。



(1) ビールとワインは子供にふさわしくない。

Beer and wine are not fit for(to) children.

(for:65.5% on:11.6% to:10.1% with:9.1%)

正答率が他の問題と比較したときに高い。「～に適している」という「適合/適性」のイメージを、生徒らが正しく理解しているからではないだろうか。2番目、4番目に多かったon、withについては、fit on(with)という用法も存在するが「はまる、調和する」という意味合いが強く、この問題には合っていない。on(with)のイメージがforの「適合/適正」のイメージと重なっている生徒も一定数いるのかもしれない。

(2) うそをついたことで彼女を非難する

accuse her of lying

(of:22.7% for:19.2% by:13.5% with:12.3%)

of(正答)を選択する生徒がもつとも多い。理由として、accuse O of ~ing と定型で教えられている生徒が多いことも考えられる。

(3) 雌牛は人に牛乳を供給する。

Cows supply us with milk.

(to:37.9% with:25.1% for:14.5% of:8.9%)

to を選択した生徒が最も多い。問題文の日本語から、第三文型 S V O₂ to ~ (SはO₂を～にVする)であると誤解してtoを選択したかと推測される。第四文型 S V O₁ O₂の特殊なパターンS (supply) V O₁ with O₂ととらえてwith(正答)を選んだ生徒は2番目に多かった。

(4) 私たちはこの点で意見が一致した。

We agreed on(with) this point.

(with:64.5% at:12.1% on:8.9% in:6.4%)

この問題はALTの先生に助言をいただき、withも当てはめられることが判明した。withを選択した生徒が半数を超えた。agree with～ の形に馴染みが深く、agreeのあとに来る前置詞といえばwithだと考える生徒が多かったのではないかと考えられる。また、atをの選択率が2番目に多かった理由として、問題文の日本語にある「点」に影響されたことが考えられる。

(5) メアリーはその包みを赤いリボンで結わえた。

Mary tied the package with a red ribbon.

(with:71.1% by:9.4% on:6.2% to:3.4%)

with(正答)の回答が飛び抜けて最も多い。withのコアイメージは「～と共に」というものであるが、この問題文でのwithは方法や手段を表すものである。故に我々はbyの選択率も高くなると予想したが、その数字は一桁にとどまった。多くの生徒がbyではなくwithだと判断できたようだ。

(6) 図書館の利用法に関するヒント

tips on(about) how to use the library

(about:47% of:24.9% for:10.6% on:9.1%)

半数近くの回答でabout(正答)が選択されており、aboutの 関連「～について」のイメージを正しく理解している生徒が多いのが分かる。ofは2番目に多く選択されているが、ofのコアイメージは付属や所属など全体のうちの一部分を表すものであるので、ofを当てはめた場合、“tips”が “how to use the library” の中に含まれるようなニュアンスが出てしまう。よってofのコアイメージが生徒たちにあまり理解されていないことが分かる。

(7) 1日中歩いてくたぐたぐだ。

I am exhausted from(by) walking all day.

(by:28.6% for:18.7% of:9.6% at:8.6%)

by(正答)の回答が最も多い。fromを選択した生徒は全体の約5%と低かったことから、fromの原因を表す用法を知っている生徒が少ないことが分かる。

(8) 頭痛がすると訴える

complain of a headache

(for:17% to:15% with:15% of:13.1%)

forの回答が最も多いが、他の選択率との差は小さい。当てはまる前置詞をイメージしにくい問題だった。forやtoは目的を表すので、それらを選んでしまうと「頭痛に訴える」というような文になってしまう。訴える対象は人であるということを考えられれば、forやtoは選択肢から除外されるのではないだろうか。よって誰が何に対して動作を行うのか、つまり主語や目的語はどれなのかをきちんと理解することも前置詞を正しく使う近道だと考えられる。

(9) 彼女は高貴な家柄の出である。

She came of(from) a noble family.

(from:82.8% to:4.9% in:2.5% of:2%)

fromの回答が飛び抜けて多い。この選択率82.8%はすべての問題の中で最大である。出身を表すときに使う come from～ というフレーズが多くの生徒に馴染みが深いからだろう。

(10) 彼らは昼食をとっている最中で、1時まで戻らないでしょう。

They are at lunch, and will not be back until one o'clock.

(in:38.7% on:24.9% at:16.3% for:7.4%)

inの回答が最も多くなった原因として考えられるのは、問題文の日本語にある「最中」という単語だ。この最中の「中」という字に引っ張られてしまいinを選択したのではないだろうか。また、in、at、onの時間や場所を表す前置詞が選択率上位3つを占めていることからこれらの使い分け方をよく掴めていない生徒が多いと考えられる。

(11) 計画の重大な変更

material changes to the schedule
(of:49% on:16% from:1.5% about:7.4%)

ofの回答が最も多くほぼ半数を占めている。これは、問題文の日本語に含まれている助詞の「の」からofを選んだ生徒が多くなったのだろう。この問題文の日本語を言い換えると「計画への重大な変更」となり、「重大な変更」(material changes)は「計画」(the schedule)の一部でなく、「計画」に働きかけるものだと考えれば、ofを選ぶことにはならないはずだ。～の=ofという考え方は馴染みが深く、英作文などでも間違えやすいところである。

(12) 私の体は調子がよい。

My body is in good condition.
(in:29.3% on:17.2% for:12.8% at:12.3%)

in(正答)を選択した生徒が最も多かった。「～の状態に/で」を表すときは、in+状態の形を使うのだが、onを選択している生徒も少なくない。確かに、この問題において正解はonではなくinであるということを決定づける理由は説明しづらい。これはコアイメージを正しく理解していたとしても必ずしも正解できる問題ではないと思われる。

(13) 監督はモダンジャズの趣味があった。

The director had a taste for modern jazz.
(of:48% in:9.6% to:7.9% for:6.9%)

ofの回答が半数近い。これはやはり「モダンジャズ」の”趣味”に含まれる助詞である「の」が原因だろう。この問題も(11)と同じく「監督はモダンジャズへの興味があった」と言い換えられる。しかし、of以外の選択率が高い前置詞が(11)と全く異なっている理由は不明である。

(14) 彼は常識に欠けている。

He is lacking in common sense.
(of:52.2% for:13.5% with:6.7% in:5.7%)

ofの回答が半数以上を占める。この結果は、lack of ~ 「～の不足」という定型で覚えられていたことが原因だと考える。我々は、in common「共通の」を定型で覚えている生徒が多いのではと予想していたが、in(正答)の選択者は全体の5.7%にとどまった。ゆえに、この問題には解答の選択肢の並び方が解答に多少なりとも影響を及ぼしたのかもしれないという懸念がある。

(15) 彼のすべてのスケッチは鉛筆で描いてある。

All his sketches are in(with/by) pencil.
(with:58.9% by:27.8% at:2.5% in:2.2%)

withの回答が半数以上で、最も多い。(5)でも見られたようにwithの手段や方法を表す用法は生徒たちによく理解されていると分かる。

(16) 家に帰ると言い張る

insist on returning home
(of:33.5% to:25.6% for:14.5% on:12.3%)

ofの回答が最も多い。onのコアイメージは「(何かに)接している」であり、insistは「固執している」という風な意味であるので、それらを踏まえると、「returning home」という所に固執してくっついている」と考えることができる。よってこの問題の正答率があまり高くなかった原因は前置詞の理解度ではなく、その前にある動詞のinsistをよくわかっていないことだと考える。

(17) 彼らは的をめがけて撃った。

They shot at the target.
(to:45.1% at:16.5% for:15.3% on:14%)

toを選択した生徒が半数近くで、最も多い。toのイメージは矢印であり、atのイメージはある一地点である。この文の状況を考えると的という一つの点を狙っているのでatが適切だといえる。しかし、的の方向

へ撃ったというふうに考えることもできるので、コアイメージだけは納得できる説明をすることが難しい。

(18) 彼女は全力をあげてその仕事をした。

She did the work to the best of her ability.

(with:26.4% for:20% on:14% at:8.9%)

この文におけるtoは限度や範囲を表すものであり、「the best of her ability まで仕事をした」と説明できる。調べてみると、to the best of one's powers で「できる限り」という意味だそうだがこの問題の日本語文は「全力をあげて」と書かれてあるので、toが正解だと分かるには少し意識が必要だったかもしれない。

(19) 彼は義務感で行動した。

He acted from a sense of duty.

(with:24.6% of:16.5% for:10.6% to:10.1%)

解答が全体的にばらけた問題である。その中でも、withを選択した生徒が最も多かった。この問題のfromは原因、動機を表すので(7)とよく似ているが、(7)ではbyが最も多く選ばれ、この問題ではwithが最も多く選ばれた。この差異はfromの後に来る単語が(7)ではwalkingという動名詞であるのに対し、この問題ではa sense という名詞句であるという違いが原因で引き起こされたと考えられる。

(20) 日本生まれの人

a native of Japan

(from:46.8% in:28.1% of:17.5% on:3.2%)

fromを選択した生徒が半数近くで最も多い。場所を表す名詞が後ろに来たらfromを適用してしまう生徒が多いのだと考えられる。この問題の日本語文は少し意識しており、「日本生まれ」と書いてあるので(9)のように、出身を表すときはfromだと瞬時に考えて選んでしまった人が多いのではないだろうか。この問題に関しては日本語文が適切ではなかったように思われる。

《問題別の考察のまとめ》

ここまでそれぞれの問題について考察してきたが、間違える原因は大きく以下の2つに分類されるだろう。

- ①問題文の日本語に影響を受けている
 - ②動詞と前置詞の覚えている組み合わせを使ってしまう
- 以下で、これらについてさらに詳しく述べる。

①問題文の日本語に影響を受けている

特に助詞が原因であり、例えば日本語の文に「の」が含まれているとofがよく選択される。これが起こるのは、英語の前置詞を日本語の助詞に無理やりあてはめようとしているからではないかと考える。英語の前置詞を異なる言語の意味空間にある日本語の助詞で理解しようとすることで前置詞と助詞の細かな意味の違いが理解しづらくなり、使い分けが難しくなるのではないだろうか。また、助詞以外にも「出」や「中」などの、漢字からも影響を受けやすいだろう。

②動詞と前置詞の覚えている組み合わせを使ってしまう

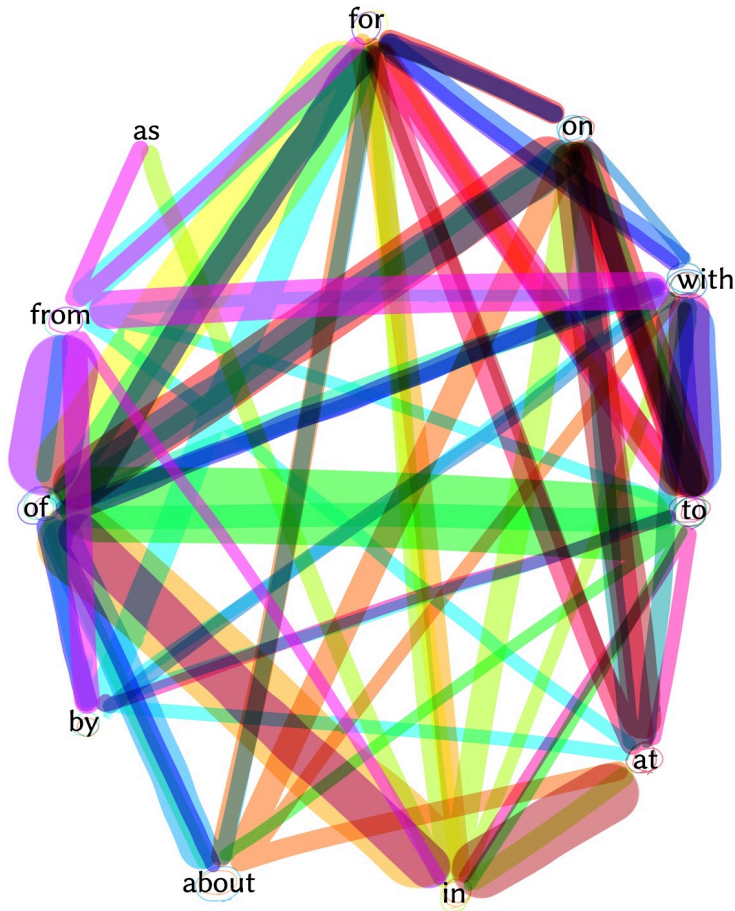
これは例えば(4)のsupply to～や、(14)のlack of～で見られる。馴染みがある組み合わせだからといっていつでも適用できるわけではないことを理解しておかなければならない

原因①と②に共通して考えられる解決策は、日本語の文(特に助詞)をそのまま捉えるのではなく「～へ」なのか「～まで」なのか「～に対して」なのか「～が原因で」なのかなど、語句同士の関係性をよく考え、前置詞が使いやすいような形に言い換えることだ。この言い換えとコアイメージをうまく組み合わせることができれば前置詞の間違いは減るのではないかと考える。

《複数の問題間の考察》

ここからは前置詞の本来の意味と生徒の認識のズレについて考察する。

下の図①は各問題で選択率が高かった前置詞(誤答)と正しい答えの前置詞を線で結んだものである。間違っただけの前置詞を選んだ人が多いほど太い線、線で結ばれた2つの前置詞が混同された問題数が多いほど線が重なっている。さらに、その下にあるグラフ③はそれぞれの前置詞が合計で何回選ばれたかを表したものである。



図①

上の図①を見るとfor—of—from、またwith—toが混同されやすいといえる。それに合わせて、グラフを見るとfor、of、fromの3つではofが最も多く選択されているので、高津生の中でofが、forとfromが持つ意味の範囲まで拡大されて理解されていると考えられる。

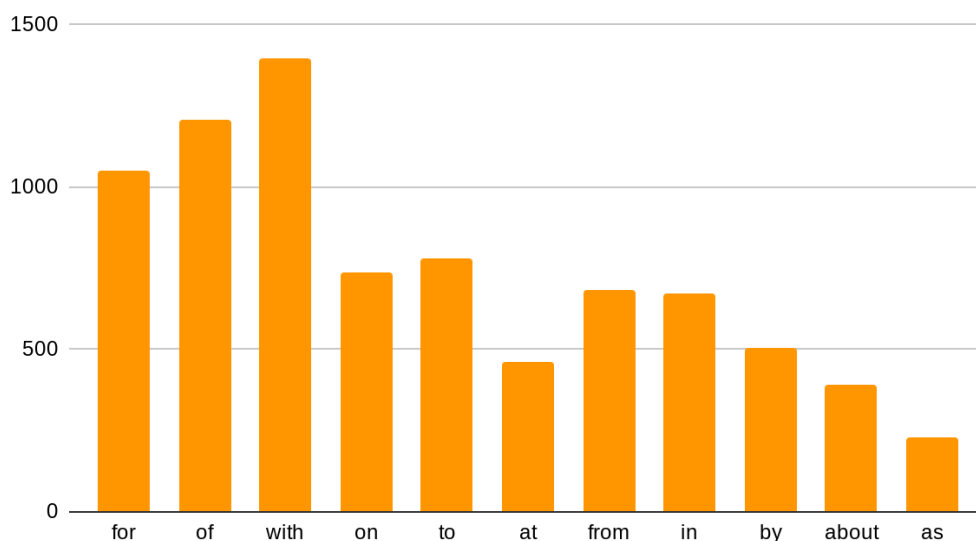
同様にwithとtoを比べると、withの方が多く選択されているのでwithがtoの意味の範囲まで拡大されていると考えられる。

《本研究に残された課題》

ここまですを踏まえ、ここからは本研究に残った課題を述べる。

Google フォームでアンケートを作成すると、解答の選択肢は1つめから順番に上から下へ並ぶ。そうすると、多くの回答者は問題文を読んだ後、上から順番に選択肢を読み()に当てはまるかどうか検討していくことになるだろう。そして、その選択肢は全部で11個ある。11個すべての選択肢を検討するのではなく、上から選択肢を読み、なんとなく合いそうな前置詞を見つけた時点でそれ以下の選択肢を検討するのをやめた生徒が多数いた可能性がある。実際に、20問すべてについて、各選択肢が選択された回数を合計し、グラフ③に表すと、以下ようになる。

各前置詞が選択された回数（全問題の合計）



グラフ③

左にある前置詞ほどgoogleフォーム上で上部に表示されたものである。全体的にグラフ③を見ると、上に表示された選択肢ほどよく選択されたということがわかる。断言はしがたいが、生徒らが解答らしい選択肢を見つけた時点でそれ以下の選択肢を検討するのをやめた、つまり、選択肢の順番が多少なりとも結果に影響を及ぼしたという可能性を否定できない。

4 結論

我々は英語学習者が前置詞を間違えやすい原因は、コアイメージを正しく掴めておらず認識との間にずれが生じていることであるという仮説を立てた。そして、コアイメージさえ掴むことができれば、前置詞を使いこなせるようになっていた。調査を通じて、前置詞を間違ってしまう要因はコアイメージだけにあるのではなく、実際にはもっと多様であることが分かった。コアイメージを正しく掴むだけでは前置詞の間違いを減らすことは難しいと考えられる。そもそも前置詞とは、名詞や代名詞を前に置き、それらの間の関係性を明確にするものであるから、日本語の助詞や漢字から、当てはまる前置詞を考えるのではなく、その関係性を考えて前置詞を選ぶことが、間違いを減らすために有効であり、重要なことだといえる。しかし、それを実践してもまだ前置詞を完璧に使いこなすことはできないので、様々な前置詞の使用例に触れて自分のものにしていくことも必要不可欠だと考える。

5 参考文献ならびに参考Webページ

竹岡広重『必携英単語LEAP』(2018)数研出版株式会社

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘『ロイヤル英文法』(2000)旺文社

中西淳. “現代英語における前置詞使用実態と日本人英語学習者による前置詞使用傾向の解明—コーパス研究をふまえた新たな前置詞指導を目指して—”. 2020-03,

<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/D1007965/D1007965.pdf>

安原千尋. “前置詞学習における認知意味論的指導に関する一考察 —前置詞at, in, onに焦点を当てて—”. 2011-03,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/casele/41/0/41_KJ00007481860/_pdf/-char/ja

吉田智佳. “前置詞の難易度順序と習得の難しさの一要因”. 2023-07,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/selt/46/0/46_19/_pdf/-char/ja

中西淳. “日本人英語学習者コーパスにおける前置詞誤用の記述的研究 —at・in・onの基本前置詞に注目して—”. 2021-01,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/celes/50/0/50_113/_pdf/-char/ja

Benesse 田中茂範「ベネッセの辞典ーコア(コアイメージ)とは」(2003)
<https://dictionary.benesse.ne.jp/jiten/koa.html>